

「Love your body — 自己肯定の化粧にむけて」

大学に入学して環境問題に興味を持ち始めた私は、アースデーと呼ばれる環境イベントで大きな違和感を覚えた。イベント会場では、ブースにいる女性のほとんどが「素っぴん」に近いメイクをしていて、ヒッピー風の衣装を身にまとった若者が多くいた。ファンデーションやマスカラをしっかり塗っている私は、どうやら「場違い」な所に来てしまったらしい。そう感じたと同時に、「環境に興味をもつ人は化粧をしてはいけないのだろうか?」、「ヒッピーのような格好をしている彼らの方が、髪型や服装に過剰に凝っているんじゃないか?」、「化粧は自然とは相容れないものなのだろうか?」という問いが次々と浮かび、頭から離れなくなった。

「化粧は人間の歴史」といわれるほど、人々に寄り添って発展してきたにもかかわらず、しばしば否定的な見方をされる。「表情を隠している」、「生活に不可欠なものではないだろう」などというふうに。化粧には、欠点の克服という自己否定的な要素が大きく働いているのは確かだ。現代では、化粧をする理由のほとんどが、「欠点の克服」につながっているかもしれない。けれども、それだけが化粧の役割なのか。単に他人からよく見られたい、というだけでは説明しきれない何かがあるのではないか。

第一章では、化粧について考察する前に、「わたし」と「身体」の関係について考察する。身体を取り巻く様々な問題は、私たちが画一的な価値基準に捉われていることを浮き彫りにする。身体についての関心はいつの時代、どこの社会でも人を惹き付けてきた。しかし、現代ほど自分の身体についての問題と関心になんじがらめになって縛られている社会は存在したのだろうか。美容への過度の執着、潔癖症、自傷行為、摂食障害など、「身体」を取り巻く様々な現象を見てみると、私たちは、支配できると思っていた自分の「身体」にすっかり支配されているかのようだ。「身体はいま、健康とか清潔、衛生、強壮、快感といった観念に憑かれてがちがちになっている」（鷺田 1998:36）のだ。

続いて第二章では、「人工」と「ナチュラル」という対立する美意識の視点から「化粧」を考察する。身体加工の一つの例として特に美容整形を挙げ、美容整形ブームにひそむ現代社会の危うさについて述べる。

化粧や美容整形の問題は、「なくてもいいもの」と一言で片付けられがちだ。それでも、化粧史をひも解けば、どんな社会の女性も男性も、身体に関心をもっていたことがわかる。しかし、「化粧で着飾ることと、日常的な身づくりは異なる」という意見もあるだろう。それでも、一般的にいう「化粧」と「身づくり」との間に明確な境界線を引くことは不可能である。身体を加工する様々な行為のうち、「何が衛生管理とでもいべき準医療技術に属し、何が美容という過度の行為とみなされるのか」（鷺田 1998:52）、その線引きは曖昧だ。章全体を通して、“何の加工も変形も施されていない身体というのは存在しないこと” “化粧の問題は、一部の女性のものだけではなく誰もが関係する社会的な問題である”こ

とを確認する。

三章では、「隠す」化粧と「表す」という化粧の二面性を考える。「隠す化粧」の例として、平安時代のお歯黒と現代のナチュラルメイクについて考察する。「表す化粧」では、化粧をポジティブに利用している例を挙げる。化粧は女性にとって外見を変化させるにとどまらず、対人行動や自己提示が積極的になることが調査でも明らかになっている。「化粧」という言葉の起源からも合わせて化粧のもつ力についてさらに考察してゆく。

自己否定ではない化粧の魅力（化粧＝自己肯定）というのはいり得るのだろうか、その問いについて、【関係性を取り戻す化粧】と題した終章において考察する。

化粧の問題は、美容という視点だけでは語るができない。文化や医療の問題、人間の幸せと健康、自然、社会の抱える複雑な問題すべてが含まれている。「人は見かけじゃない、中身だ」、「美醜にこだわることは取るに足りないこと」と、“美”を取り巻くさまざまな問題を撥ね付けることは簡単だ。しかしその前に、美の支配力や自身の美的基準を客観的に考えることは、世間の価値観に囚われることから自身を守ることになる。“自己肯定の化粧”は、化粧の方法ではない。「肯定」は、「価値があると判断すること、認めること」を意味する。「化粧」という言葉に含まれている意味は「自身と向き合い、周囲のあらゆるものとの対話をする」ということ。自己肯定の化粧は、周囲に目を向けて、自分を愛でる行為である。「化粧」が、もともと自己肯定の作業なのだ。みな自分が自分自身の中に価値を取り戻し始めるとき、過度に美醜にこだわらない、年を重ねた自分の身体をも愛せるような社会になる。そんな社会は、今よりずっと生きやすい。